

『為兼卿和歌抄』「境にしたがひて」考

中村健史

『為兼卿和歌抄』に次のような文章が見える。

境にしたがひて、起くる心を声に出だし候ふことは、花に
鳴く鶯、水に住む蛙、すべて一切生類みな同じことに候へ
ば、「生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける」と
もいひ、（下略）

「人も、動物も、「境にしたがひて」わきおこる心を声に出す
ことは同じである。すなわちそれが歌のはじまりであつて、だ
からこそ『古今集』の仮名序にも「生きとし生けるものはすべ
て歌を詠む」と言うのだ」。

本稿で特に取りあげたいのは、傍線を付した「境にしたがひ
て」という表現である。従来、この句については「対象と一体
になつて」「対象にしたがつて」と解するのが一般的であつた。
たとえば、久松潜一氏『日本古典文学大系 歌論集 能楽論集』
（岩波書店、一九六一年）は全体を「対象と一体になること」と
通釈し、小川剛生氏『歌論歌学集成』（第十巻、三弥井書店、一
九九九年）は「境」に「知覚される全ての対象。境象」という
注を施す。

『大系』『集成』ともに「補注」で言及するとおり、中世歌論
にあらわれる「さかひ」が対象の意を含むことは、つとに小西
甚一氏「中世表現意識と宋代詩論」（『国語』一、一九五一年十月）
の指摘するところであつた。今、その内容をかんたんに紹介す
るならば、『毎月抄』にいわたる「一境に入りふす」とは、「境
象にふかく浸透してゆくこと」であり、「境象の真実と感合す
ることに他ならぬ」。『為兼卿和歌抄』はこうした定家の論をも
つともよく受けつぐものであり、「景物につきて心ざしをあら
はさむも、心をとめ深く思ひ入るべきにこそ」という詠歌姿勢
のなかで成りたつ「被表現性」が「さかひ」なのだという。

さらにまた、氏はそのような「さかひ」の用法が唐代詩論に
さかのぼりうるとして、王昌齡『詩格』を引く。「夫れ文章を
作るには、但だ多く意を立つ。左穿右穴して、心を苦しめ智を竭
さしめ、必ず須く身を忘れて、拘束すべからず。思ひ若し来た
らざれば、即ち須く情を放はなにして却つて之を寛うし、境を
して生ぜしむべし。然る後に境を以て之を照らせば、思ひは則
ち便ち来たり、来れば即ち文を作る。如し其れ境思来らざれば、
作るべからざるなり」（『文鏡秘府論』南卷、『文筆眼心抄』所引）。
しかしながら、そもそも『為兼卿和歌抄』のいう「境」は対

象のことなのだろうか。対象にしたがって、あるいは、対象と一体となつて。先行研究は施線部をそのように解する。他方、『毎月抄』や『詩格』に登場する「境（さかひ）」は、うたの生成がいかに人間の思念とかかわるか、という文脈で用いられる言葉であつた。詠うべき対象は明らかに歌人の外側にあり、だからこそ「ふかく浸透してゆくこと」「感合すること」が問題になる。景物を「境」としてとらえるには、詠者による対象化の手続きが欠かせない。はたして無心に鳴き声をあげる鶯や蛙のうちに、「こまで複雑な精神のはたらきを認めてよいのか。」「対象と一体になる」とは、人にしてはじめて可能ないとみではないのか。

前掲「中世表現意識と宋代詩論」がすぐれた示唆を多く含み、『為兼卿和歌抄』を考える上で、今なお重要な位置をしめることは言うまでもない。だが、「境にしたがひて」の訓詁にかぎつていえば、いったん小西氏の論と切りはなして吟味する必要があるように思う。「一境に入りふす」「須く情を放^{はな}にして却つて之を寛うし、境をして生ぜしむべし」といった用例が語釈としてふさわしいかどうかは、なお慎重に判断せねばならない。

取りわけ気にかかるのは、従来の注釈がややもすれば「境」の意義づけに終始し、「境にしたがひて」という言いまわしを充分検討してこなかった点である。だが、数は少ないながらも、中世の文献には次のような文章を見出すことができる。

宜に就き境に随つて沙汰を計らしめ給ふべき者なり。（就宜隨境可令計沙汰給者。）

『御産部類記』巻下、康治二年六月二十三日）
草有り林有り境に随ひて馨る。（有草有林隨境馨る。）

（大江周房「夏日部事詩」、『猪熊閑白記』紙背詩懷紙）
此二ノ心ヲ発テ更ニ動事ナクテ、縁ニフレ境ニ随テ、イカニモシテ妄念ヲヤメントハゲミ候ヲ、仏道修行ト申候也。
（叡尊『興正菩薩御教誠聴聞集』修業用意事）
望み有るの時は之を賞め、響を成すの日は早に申「一字欠」。用捨境に随ふの条、自由の至りなり。（有望之時者賞之、成讎之日者早申「一字欠」、用捨隨境之條、自由之至也。）

（豊前益永家文書「宇佐武輔申条」、元応二年三月）

冒頭に掲げた『御産部類記』は、二条院の誕生にあたり読書鳴弦の役をいかにすべきか問いあわせた記事である。返答は「親王家の御産については特にしきたりもないので、便宜にしたがつてはからえ」というものであつた。「隨境」は「就宜」とほぼ同義、すなわち「そのときの状況にしたがって」の意と思われる。

大江周房詩は『猪熊閑白記』（一一九七～一二二七年）紙背に収められた七律の第一句。「草があり、林があり、その場所にふさわしいさまで香っている」というような内容であろう。「草葉に結ぶ白露の、あだに消行命ぞと、境にふれたる、景氣にて」（乙本『八幡愚童訓』巻上・放生会事）、「境につけ事に触れて、悲しく哀れ」「る御事のみ多かりければ」（弘安本『北野天神縁起繪巻』巻上）といった言いまわしに近い要素を持つ。

三番目の『興正菩薩御教誠聴聞集』は、真言律僧叡尊の教えを弟子がまとめたもの。弘安年間（一二七八～八七年）の成立と

目され、『為兼卿和歌抄』とほぼ同時期の文献である。文中「二ノ心」は上求菩提、下化衆生を指し、これらの心を動かすことなく、機縁や立場にしたがって仏道修行にはげめと説く。

最後の「宇佐武輔申状」は、宇佐八幡神職をめぐる訴状の一部である。惣検校と大宮司の上下関係について争論となり、「自分が就任を望んでいるときにはその職をよく言い、ひとたび敵対したときには……という。褒貶が「随境」であること、はなはだ勝手である」と相手方を難じている。途中欠字があつて文意がとりづらいが、おそらくは「時々の立場によつて」と解するのが自然ではないだろうか。

また、文学作品では『和漢朗詠集』巻下・僧に「明鏡乍ちに開けて境に随ひて照らす」(小野篁・六〇七)、僧の叡智は明鏡のごとく、機縁にしたがつて人々を導く、という句が見える。その古注釈に

明鏡ト者、智慧ヲ云也。鏡ノ、一切ノ物ヲ、随折々、如照、寂光大師般若経供養ノ詞、広ク説法アリシヲ云也。

(国会図書館本『倭漢朗詠注』院政期以前成立か)

上句ハ、智慧ノアキラカナルコト、カガミノゴトシ。コノ慧鏡ハ、ヨリニシタガヒテナム、テラスト云也。

(『和漢朗詠集永清注』鎌倉中期以前成立か)

随境トハ、機ニ依テ説ク義也。

(『和漢朗詠集仮名注』室町初期以前成立か)

とあるとおり、ここでも「境に随ふ」は「ヨリニシタガヒ」「機ニ依」ことをあらわす措辞にほかならない。(二)

以上、管見に入つた「随境」の語は、いずれも「置かれた状況や立場によつて」「時々の事情にしたがつて」と理解すべきものであつた。もとより、前後の文脈によつて、内容には多少のはばがあるう。しかし、少なくとも用例を見るかぎり、そこに「対象と一体になる」という意味を認めることはできなかった。『為兼卿和歌抄』の文章についても、解釈を考えなおしてみるのが必要ではないか。

境にしたがひて、起こる心を声に出だし候ふことは、花に鳴く鶯、水に住む蛙、すべて一切生類みな同じことに候へば、(下略)

花に鳴く鶯と水に住む蛙は、おのずから違つた環境に生きる。置かれた場所が違えば、当然、「起こる心」も同じではありえない。境にしたがつて生ずるがゆえに、鶯の心、蛙の心、人の心はそれぞれ異なる。だが、わきおこる思いが声となり、歌となるという点では、あらゆる生類が同じである。鶯も、蛙も、人と変わるところはない。——為兼は、そのように言おうとしたのではなかったか。

そもそも、外物によつて心が触発され、歌が生まれる、という考えかたは『為兼卿和歌抄』に特徴的なものであつた。(三)

花にても、月にても、夜の明け、日の暮るる景色にても、そのことに向きてはそのことに成りかへり、そのまことをあらはし、そのありさまを思ひとめ、それに向きて我が心のはたらくやうをも、心に深くあづけて、(下略)

「目の前の景色に没入し、心がどのように動くか、作為を加えずよく観察せよ」と『和歌抄』は説く。「我が心のはたらくやう」は、ほぼ「起こる心」に対応しよう。心を生み出し、はたらかせる契機となるのは、花であり、月であり、あるいは曙や夕暮れである。そして、「そのことに向きてはそのまことをあらはし」とある以上、当然、花に向かつてはたらく心のありかたと、夕暮れに向かつてはたらく心のありかたは、同一ではない。わきあがる心は、きっかけとなる景物によって、内容を異にする。

「境にしたがひて」心が起こるといふとき、為兼の念頭にあったのは、こうした生成のメカニズムであつたに違いない。ただ、鶯や蛙は「そのことに向きてはそのことに成りかへり」という自覚的な没入を行うことができない。だからこそ「心のはたらくやう」ではなく、「起こる心」という、より自然発生的な言いまわしを選ばれるのであつた。

人はみずから詠うべき対象を選び、「そのことに向き」「そのまことを」あらわすことができる。しかし、生きとし生けるも

のの多くは、そうでない。与えられた環境のなかで、たまたま目の前にあつたものに心ひかれ、声をあげる。「境にしたがひて」とは、鳥獣虫魚特有の感応をあらわす言葉として、為兼歌論に位置づけられるのではないか。

〔注〕

(一) 嘉禄本をはじめとして『朗詠集』諸本は多く「境」字にヲリの訓を付す(『類聚名義抄』に「境 サカヒ ヲリ」)。これもまた「随境」が「状況にしたがつて」の意であつて、「対象と一体になつて」ではないことの一証とならう。

(二) 外物によつて心が触発されるという考えかたは、伏見院にも次のような例が見える(高松宮旧蔵『手鑑』所収広沢切、詞書「視聴」)。

春花秋月幾催興

春花秋月幾たびか興を催し、

林鹿峽猿只斷腸

林鹿峽猿只だ腸を断つ。

(なかむら たけし・大和大学教育学部講師)